

江戸の小さな旅

—— 雑司ヶ谷鬼子母神を中心に ——

はじめに

江戸時代は、一般の庶民が、比較的自由に旅をした時代である。

とくに一九世紀前半の文化・文政期以降になると、社会的な余裕も生まれ、旅の情報も豊かになって、人々が各地に盛んに出歩くようになる。しかし、この時代の旅は、輸送手段が未発達で、部分的に船や馬も用いられたが、基本的には徒歩であった。それゆえ旅は、決して楽ではなく、それなりの日数と費用を要した。そこで江戸の人々は、大がかりの旅ではなく、日帰りできる程度の距離にある遊興地に向いて、小さな旅を楽しんでいた。

ここでいう小さな旅とは、数時間をかけて寺社参詣に赴き、そこで酒や料理もしくは女色を楽しみ、その日のうちに、我が家へ

と帰る遊興を意味する。厳密には、これを旅という範疇に含めるには、異空間で一夜を過ごす宿泊という過程を省く点で、やや問題も残る。しかし、現代の日帰り旅行が、すでに江戸時代に成立していたと見ることは可能であろう。

小稿で扱う小さな旅は、江戸時代における旅の基本要素を満たすものと判断される。つまり近世における旅は、役向きや商用などを別とすれば、社寺参詣・巡礼・代参などが基本で、民間信仰に基礎をおいたものであった。その代表例は、伊勢参りであるが、その他にも、さまざまな講が生まれ、数多くの人々が、各地の宗教的な施設への参詣を行っていた。

こうした社寺参詣は、当人および当人が属する集団の「幸福」を願うもので、何よりも「御利益」が重視される。その情報源は、村ごとに残る伊勢道中記などのほか、名所記などの書物であった。

原田信男

人々は「願掛け」のため、遠路に足を運んだが、そこには「楽しみ」がなければならぬ。「お遍路」のような精神性を表に出した巡礼などを別とすれば、一般に道中および目的地での「楽しみ」が、旅の重要な構成要素だったのである。

しかし庶民にとって、本格的な旅の実現は難しく、講を組んで出かけたとしても、それは長年の貯蓄の成果であり、ましてや家長以外が、自由に望めるようなものではなかった。それゆえ、手軽な日帰り程度の小さな旅が、男女を問わず多くの都市民や農民に希求されていたといえよう。例えば、こうした小さな旅の究極の形は、浅間信仰における富士塚に求めることができる。これは住居地の近辺に富士山を模した二、三メートル程度の塚を築いて、その途中にいくつかの祠堂模型を配したもので、富士参詣がたちどころに実現する仕掛けである。

しかし、これではミニチュア過ぎて、「御利益」は確保されたとしても、旅の楽しさはカットされてしまう。そこで江戸近郊における「御利益」の多い民間信仰的な施設が、観光地となり、小さな旅の目的地となった。そうした場所として、第三章で見るように、一九世紀前半の江戸には、浅草や深川、亀戸や王子、さらには雑司ヶ谷・堀之内・目黒といった盛り場があった。これらの地は、いずれも江戸市中から、ほぼ一〇キロメートル以内に収まる地点で、そこに願掛けを行う宗教施設があり、加えて酒色つまり

食欲と性欲（セクシャルな雰囲気＋セックス）を満たす遊興施設を伴っていた点が重要である。

つまり江戸の小さな旅には、祈願・食・性という三つの要素について、徒歩片道二〜三時間以内で満たされることが、必要十分条件だったのである。小稿では、先のうちから、その代表的事例として、雑司ヶ谷鬼子母神の場合を取り上げ、これを分析の対象とする。また時代的には、江戸の庶民が盛んに旅をするようになり、その関連史料が最も豊富に残る文化と文政期を中心に扱いたい。

一、江戸の行楽と情報——その一年と『東都歳事記』

まず文化と文政期に、どのような小さな旅があったのかを見ておこう。江戸庶民は、江戸およびその近郊の宗教施設などを、しばしば訪れて楽しんでいたが、そうした行楽には、一種の季節的サイクルがあった。つまり四季折々に、訪れる場所が異なり、その時々の風物を楽しんだり、願掛けや御利益を目的とした寺社の参詣においても、特定の日時に集中的に人々が参拝するというシステムが成立していた。

そこで江戸の行楽の一年を通じたサイクルを、一覧してみると表1の如くなる。江戸のどこかで、毎月一度以上は、大きな

イベントがあり、江戸市民の多くが、これに出かけた。この表から明らかなように、そのほとんどが、寺社参詣の形をとっている。

また宗教には無関係にみえる花見にも、寺社が登場するのは、その場所の公共性ゆえで、当然ながら整備された境内などには、人々を和ませるために桜などが植えられていたことから、そこが花見の名所となった。

もともと桜の名所は上野の寛永寺で、その時期には大勢の市民が訪れ、酒食や遊興にふけて騒いでいたが、なにしろ寛永寺は將軍家の廟所であった。そこで騒がれては困るので、將軍・吉宗は、王子の飛鳥山と浅草の隅田堤さらには品川の御殿山に、桜の計画的な植樹を行い、桜の名所とした。上野寛永寺付近で問題が起きないようにと、庶民の遊樂の地を、江戸の市街周辺部に設けたのである。

花見以外の行楽で、宗教と無関係ながらも人出の多かったのは、三芝居顔見世番付狂言だろう。劇場界の新年にあたる一月一日は、新しい顔ぶれで最大の歌舞伎興行が行われる初日で、この時に演じられる特別な狂言を顔見世狂言といい、これに伴って顔見世番付が発行された。劇場関係者は、袴あるいは羽織袴で祝儀を述べ、三日間は雑煮で祝うなどするが、この時には、観客も前夜から徹夜で入場するのを常とした。

こうした歌舞伎の江戸三座として人気を集めたのが、堺町の中

村座・葺屋町の市村座・木挽町の森田座で、その周辺一帯は芝居町としても賑わいをみせていた。なかでも堺町・葺屋町は、現在の日本橋人形町付近で、古くから人形芝居や雑芸師などの見世物小屋が並ぶとともに、飲食店や屋台が集まり、江戸随一の盛り場として、大勢の人々が芝居を見て、帰りに飲食を楽しむという光景がみられた。なお天保の改革の際に、この江戸三座は、風俗紊乱を理由に、浅草に一括移転させられて、その後の浅草繁栄の大きな要素の一つともなった（竹内二〇〇〇）。

このほか潮干狩りや納涼・菊見・紅葉狩りを除けば、これらの行楽のほとんどは、何らかの形で宗教と関係し、社寺参詣というスタイルをとっている。ただ稻荷信仰や八幡信仰さらには日蓮宗寺院、あるいは特定の有名寺社という限定が付いているようにみえるが、現実には、宗教・宗派にとらわれるものではなく、どこでも良かった。人々は、特定の信仰心に基づいて、これらの寺社に出かけたのではない。

庶民にとつては現世利益が最も大切で、原理原則よりも現実の生活面で、どういう効能があるのか、が非常に重要であった。もともと寺社参詣は、靈験あらたかな遠方の有名寺社へ祈願の旅を伴うものであった。村であれば、お伊勢参りのように、村人たちが資金を出し合い、農閑期に出資者が順番に伊勢神宮へ代参し、村として豊饒を共同祈願すると同時に、旅を楽しんだ。しかし、

表1 江戸の代表的行楽一覧

月	行事	内容	場	所	備考
正月	初詣	元旦参詣	浅草寺・神田明神・川崎大師		
	七福神参り	元旦～7日までに参詣	浅草七福神（浅草寺・待乳山聖天・鷲神社など9寺社）		初詣に娯楽の要素が加わる
2月	初午	稻荷信仰とセット	赤坂豊川稻荷など		
3月	花見	桜を見ながら飲食	寛永寺・道灌山・飛鳥山・隅田堤・御殿山		吉宗が江戸に花見場所を設定
	潮干狩り	磯遊び＝野外で飲食	品川海岸・深川洲崎		
3～5月	出開帳	成田山等が江戸で開帳	本所回向院・深川永代寺・湯島天神・深川浄心寺		江戸で著名寺社への代理参詣
5月	納涼・船遊山	涼を求めて川遊び	両国より浅草川		
	両国川開き・花火	霊の供養と水難防止	5/28～8/28両国		船宿・料理茶屋が花火代を负担
6月	蓮見	水辺で蓮を楽しむ	上野不忍池		
	山王祭	神輿は江戸城へ	赤坂日吉神社（別称：御用祭・天下祭）		神田祭と隔年交替で実施
7月	虫聞	松虫開きの名所	道灌山（鶯谷～日暮里）		買った虫を盆前に放生する
	四万六千日	功德の多い縁日	7/9観世音参詣：浅草金龍山・芝愛宕神社		雷除赤玉蜀黍・ほおずき市
	川施餓鬼	川辺で餓鬼に供養	本所羅漢寺・回向院・隅田川施餓鬼（鎌倉妙法寺より出張）		灯籠流し
	二十六夜待	最も遅い月待ち行事	7/26品川海辺・高輪台などで夜半の月見		
8月	八幡宮祭礼	八幡信仰	深川富岡八幡		深川洲崎に料亭多し
9月	菊見・菊人形	菊細工の見せ物	駒込・巢鴨の菊作り・菊人形（菊細工）＝染井の植木職人		もとは麻布狸穴
	神田祭	神輿は江戸城へ	神田明神社（別称：御用祭・天下祭）		山王祭と隔年交替で実施
10月	紅葉狩	春の桜に次ぐ花見	上野寛永寺・谷中天王寺・滝野川・根津権現・品川東海寺		
	お十夜	浄土宗の十夜法要	浄土宗10/10：芝増上寺		
	御会式	日蓮の追恩法会	池上本門寺・堀之内妙法寺・雑司ヶ谷法明寺鬼子母神		日蓮宗寺院の重要行事
	勸進相撲	プロによる相撲興行	深川富岡八幡、のち本所回向院		
11月	三芝居顔見世	新顔ぶれによる初興行	浅草：市村座・森田座・中村座		劇場年中行事のうちの最大興行
	西の市	大鳥神社の祭礼市	浅草：鷲神社（吉原裏）		鷲＝大鳥は大取で商売の繁栄の意
12月	年の市	毎月の定期市の最後	15日深川八幡・17～18日浅草寺・19～20日神田明神		年末商戦
	王子の狐火	大晦日の狐火で吉凶占	31日王子稻荷		飛鳥橋の料理屋：扇屋・海老屋

(2004/12/05：食生活史懇話会・鈴木晋一氏報告レジュメをもとに原田が作成)

村のような共同体をもたない大都市の庶民は、自ら出かける個人祈願の形で、現世利益を得ようとした。

神仏からの利益を得るには、さまざま事態に対処する願掛けと、有名寺社の秘仏の効能に預かるため特定の公開に押しかける開帳とがあった。願掛けは、特定の神仏からの霊力を得て、治病や安産・繁昌などの諸願を成就するための寺社参詣で、個人の発意で行われた。それぞれが、効能の高い寺社に頼むためには、願掛けに関する情報が必要で、大坂の例ではあるが、文化年間に二種類の『願掛重宝記』が出版されている（宮本一九七七）。

文化一一（一八一四）年の二世・並木五瓶作のものと、同一三年の浜松歌国作のもので、ともに願掛けの場所・その内容・願掛け行為・御礼参りの仕方などが、詳しく記されて、願掛け専門のガイドブックとなっている。ただ、この願掛けには集団性はなく、また著名な大寺社よりも小祠が多いため、密やかな小旅行に過ぎなかった。むしろ、たくさんの人出が見込まれたのは、開帳という定期的行事であった。

そもそも寺社には、境内にいくつかの小さな堂社が建てられ、さまざまな神仏が勧請されている。例えば、浅草寺には、日光二荒山の奥にある荒沢不動を勧請した荒沢不動堂がある。不動については、代々成田屋を名乗る市川團十郎による、強い成田不動信仰と不動尊靈験記の上演もあって、目黒をはじめとする五色不動

などととも、江戸庶民の間に根強い不動信仰が広まっていた。このため成田不動の江戸出開帳が人気を呼んだことなどもあり、荒沢不動の境内勧請は、浅草寺が不動信仰の浸透に対応したものといえよう（比留間一九七七）。

この浅草寺荒沢不動も、江戸時代に四回ほど居開帳が行われているが、これによって奥日光の荒沢不動にお参りしたのと、ほぼ同様な御利益を得ることが可能となる。本所深川の回向院は、そうした江戸における出開帳の場として知られるが、有名諸仏の境内勧請と江戸への出開帳は、庶民に御利益を振る舞うにあたって、遠路の旅を必要とせずに、まさしく小さな旅で代用させるというサービスを提供したのである。

また回向院の境内では、天明期以来、勧進相撲が興行され、明治から昭和にかけての国技館は、ここに設けられていた。さらに見世物興行も催され、両国橋東詰に位置した、その門前には、多くの参詣客が集まり、浅草寺と肩を並べる盛り場として繁昌をみせた。回向院にしても、浅草寺にしても、そこは信仰空間であると同時に、遊興空間でもあった。聖と俗の混淆するところにこそ、多くの人々を惹きつける魔力があり、そこへの小さな旅を江戸庶民は楽しんだのである。

こうした小さな遊樂の旅は、先に見た願掛けなどの場合とは若干異なり、定期的な非日常への誘いを基本としていた。つまり何

時でも良いのではなく、特定の日に繰り返されることによつて、ほどよい免罪符と楽しみが付加されることになる。江戸内外の寺社には、それぞれのスケジュールがあり、そこに参詣する人々は、前もつてどの日にどこへ出かけるかを、予め計画しておく必要があった。

そうした情報入手する手段は、さまざまあつたであろうが、その最たるものが、『東都歳事記』であつた（日本名所風俗図会）。同書は、三〇年余の歳月を費やした名所図会の代表作『江戸名所図会』を刊行した斎藤月岑が、その四年後の天保九（一八三八）年に前編のみを出版した年中行事書で、すでに文政年間には清書本が出来上がつていた。その特色は、江戸および江戸近郊の年中行事を月順に概要を略述した点にある。

『江戸名所図会』が風俗地誌として、江戸における名所旧跡・寺社仏閣などの来歴や現況を空間ごとに記したものとするなら（日本名所風俗図会）、『東都歳事記』は毎年の時間軸に沿つて、江戸の歳事を網羅しようとした本格的ガイドブックといえよう。今、正月の五日までを除いて、六日から八日までの記事を示せば、次の如くである。

六日 ○江戸ならびに遠国の寺社僧徒社人山伏御礼登城（五つ時、先規によりて献上物あり）。

○良賤年越を祝ふ（六日年越といふ）。今夕門松を取り納む（承応の頃までは十五日に納めしとなり、古来は十五日に爆竹ありしが、国禁によりて今なし）。

○産土神参（今夜七種菜をはやす、厄払ひ来る）。

（毎月）神田三島町毘沙門参、十六日二十日もあり、いづれも夕方より賑へり。

（毎月）四谷新宿後正受院脱衣婆参、百万遍修行。十六日ならびに二十日もあり。

七日 ○若菜（人日）。御祝儀、諸侯御登城。今朝貴賤七種菜粥食す。

○亀戸天満宮若菜餅の神供、御食に若菜をそへて奉る、十五日には粥を献る。

○王子権現牛王加持、牛王宝印をもて坊中の頭に押す事あり、禰宜等これを勤む。（毎月）本所羅漢寺らかん供養。（毎月）

霊岸島越前家御中屋敷湯尾峠孫嫡子社参詣。

八日 （毎月）薬師参。茅場町（别当知泉院、当所ことに参詣多し。縁日毎に夕方より商人多く、また盆栽の草木庭木等を售ふ事夥し。ゆゑに坂本町の辺りを植木店といふ。すべて近來盆種の草木世に行れて、縁日毎に商ふ内にも当所を首とす）。

本郷四丁目真光寺。浅草新堀端東漸寺（正五九月開帳）。本所

二つ目弥勒寺(川上やくし)。本所番場東江寺(多田のやくし)。木下川浄光寺、愛宕下真福寺。麴町八丁目常仙寺(寅やくし)、毎月十二日大般若)。四谷北寺町真福寺(朝日やくし)。伊皿子福昌寺。目黒成就院(鱒薬師)。木挽町六丁目河岸。新井村梅照院(毎月)(小日向大日坂妙足院大日参)。

(毎月) 鬼子母神参。雑司ヶ谷(大行院常に百度参あり)。入谷喜宝院。本所出村本仏寺(千巻陀羅尼修行、十八日二十八日もあり)。目黒正覚寺(常に参詣あり、正五九月、八日、十八日、二十八日には千巻陀羅尼修行あり)。三田(三丁目)蓮乗寺。(以下同)

六日の僧徒・社人などの江戸城への登城や、七日に七草粥を食べる習俗も記されているが、ここでは六日の神田三島町毘沙門参や四谷新宿正受院百万遍修行のように、一六日・二六日に、しかも毎月行われるという記載が重要だろう。また八日の薬師参であれば、これも毎月であるが、茅場町知泉院の薬師をはじめ、浅草でも本所でも、あるいは愛宕のほか麴町・四谷・目黒など、どこかの寺院に薬師があるかを、さまざまな情報とともに書き記している。のちに触れる鬼子母神も同じで、雑司ヶ谷のほか入谷・目黒・三田でも、鬼子母神参が可能であることが一目で分かる。

それぞれの寺院や自分の家の宗派とは無関係に、江戸の人々た

ちは、さまざまに神社が勧請した境内の諸神諸仏に詣でて、いろいろな祈願成就を期待しながら、それらの神社仏閣をしばしば訪れたのである。まさに、そうした民間信仰レベルの年中行事に関する情報の集大成として、『東都歳事記』が成立をみたのである。そして、その背景には、聖なる空間への遊興を伴う小さな旅を、心から楽しみにしていた江戸庶民の姿があったのだといえよう。

二、小さな旅の様相——『遊歴雑記』と『世事見聞録』

文化文政期において、江戸近郊を歩き回った小さな旅の記録に、『遊歴雑記』があり(江戸叢書)、当時の江戸庶民の風俗を詳細に記したものに、『世事見聞録』がある(日本庶民生活史料集成)。いずれも個人の旅行記もしくは見聞記録であるが、それぞれに江戸近郊の様子と庶民生活の実態について、事細かに記した貴重な史料となっている。まず、この両書を中心に、どのようなところに人々が集まり、何を見て、どんな楽しみ方をしていたのかを、検討しておこう。

『遊歴雑記』は、江戸は小石川小日向水道町にあった本法寺の子院・廓然寺の住職であった大浄・津田敬順の紀行文である。敬順は、十方庵とも称したが、文化九(一八一二)年に五一歳で隠居し、余生を江戸近郊の散策と、常陸・下総・安房・武蔵・相模・

伊豆・駿河・遠江・三河・尾張へと小旅行に向向いて暮らした。

そうした小さな旅は、文政一二（一八二九）年に、六八歳まで続けられ、その記録である『遊歴雜記』は、全五編一五冊に及び、計九五九話が収められている。彼は、携帯コンロと煎茶道具を持ち歩いて、随所で野点を行いつつ、それぞれの土地をこまごまと観察して、その印象を連綿と書き綴った。

ここで敬順の小さな旅を、事細かに紹介する余裕はないが、同書からは、文化・文政期に小旅行をサポートするための飲食店が、あちこちの街道沿いに立ち並んでいた様子を窺い知ることができ、文政四（一八二二）年に成った第四編卷之下第一八話「烏山村の酒樓豊倉の林泉の鮎」には、八王子方面に向向いた時の街道事情が記されている。内藤新宿から八王子までは、一〇里（四〇キロメートル）余で、旅宿が置かれたのは、府中と八王子のみであった。基本的に一日、何かが生じて二日あれば、充分にたどり着ける行程である。

しかし小休止や食事を取るための立場カテバつまりドライブインのよカテバうな酒樓食店が各所に設けられており、その数は数十ヶ所に及んだという。例えば、荻窪には港屋五兵衛・萬屋太郎右衛門・萬屋善兵衛といった店があり、下高井戸には鈴木屋・中田屋、上高井戸にも武蔵野・升屋・油屋などといった飲食店があった。

いずれの店も間数が多く、庭なども立派に作って良く見せてい

るが、敬順にとっては、なかなか口に合う料理を出す店がない、と嘆いている。それぞれに趣向を凝らして、客を引こうとしているが料理が今ひとつ、というのが敬順の評であった。

そうしたなかで敬順は、烏山の豊倉平吉の酒樓だけを絶賛している。平吉は、烏山の間屋場を務めた家柄らしく、その店のしつらえは、間口数十間、奥行き四〇間と広く、庭には清流を引いて、鮎のほか鮒や鯉を飼っていた。店構えのみならず、料理を盛る器も非常に綺麗で、その取り合わせも素晴らしく、もちろん料理の手際も見事で味付けも申すに及ばず、江戸の料理屋で飲食を楽しんでいるようだ、と褒めちぎっている。

この時に敬順が連れの三人と当地の名産という鮎を所望したところ、六、七寸（一八〜二一センチメートル）もある見事な鮎の甘露煮が、呉須の器に一五、六匹も出された。敬順は大いに満足し、次に高尾に来るときにも、是非また立ち寄りしたいと記している。

こうして文化・文政期には、あちこちで飲食を楽しみながら、小さな旅を実現しようというインフラの整備がなされていたことが窺われる。江戸から二〜三泊で、八王子や高尾を見物して帰るような小さな旅は、すでにちよつとした江戸庶民のなしようところであり、その途中の酒樓食店で、適宜飲食を楽しんでいた。

すなわち、かなりの人々が往來していたことから、江戸へ八王

子間に、数十軒ものドライブイン的な飲食店が立ち並んでいた。表向きは高尾のような宗教施設の訪問とはいえ、もともとと遊興を目的とした小さな旅であれば、多少の千鳥足でも、そうした飲食店での楽しみが、小さな旅に大きな比重を占めていた、と考えてよいだろう。

ここで紹介した八王子・高尾の場合であれば、最低二〜三泊は

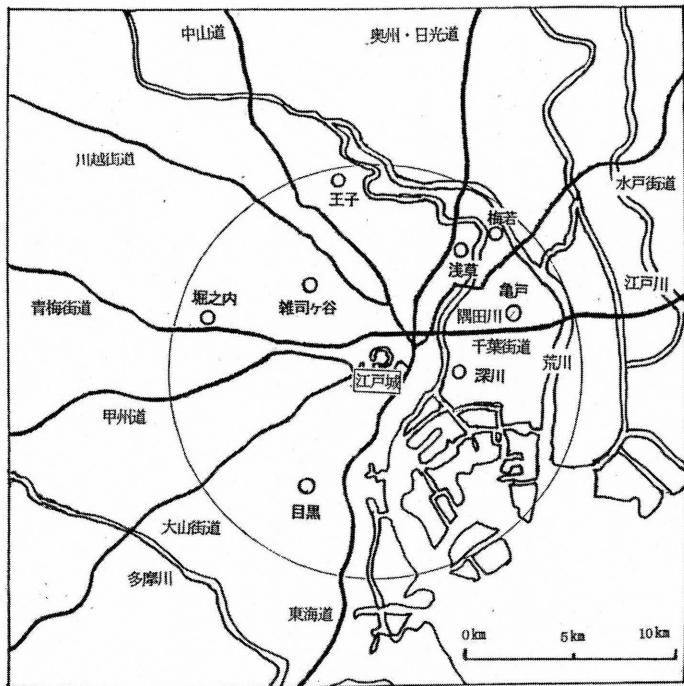


図1 江戸の遊興地（『世事見聞録』より作成）

必要としたが、江戸近郊なら、日帰りの小さな旅は、はるかに容易な遊興であった。そこで次に、江戸の庶民が、近郊のどのような所を、日帰りで訪れたのかを検討してみよう。

武陽隠士著『世事見聞録』は、文化一三（一八一六）年に成った記録で、一八世紀末の天明期から寛政期さらには文化期が観察の対象となっている。江戸時代のうち最も消費経済が美德とされた時代で、その奔放な社会の世相が、トータルな視点で観察されている。つまり武士・農民・町人・僧侶をはじめ、遊女や穢多・非人に至るまで、さまざまな社会階層の有様を克明に記録しており、ここから日本における萌芽的な市民社会の様相を知ることができる。

著者は、序文に武陽隠士とあるだけで、その正体は分からない。旗本もしくは御三家・親藩の浪人、あるいは公事（＝法務）に関わった人物とも考えられているが、推論の域をでない。いずれにしても江戸を中心に見聞を重ねたかなりの知識人で、裕福な生活を営んでいたと内容から判断される。

全般に筆致は厳しく、序文に「静謐の御代なれば、善事も有り……その善きはいふに及はされは、ひたすらに、当時の悪しき事のみを記す也」とあるように、社会批判に満ちあふれた書となっている。それゆえ過大に誇張した部分もあるが、逆に当時の世相の有様が浮き彫りにされている点が興味深い。

本書の性格については、後に江戸庶民の遊興を論ずる際に、改めて問題としたい。ここでは、とりあえず文化年間頃に、どのような場所が江戸の盛り場となっていたのかを、『世事見聞録』から見ておこう。同書は、江戸の人々が物見遊山や参詣に訪れる場所として、「雑司ヶ谷・堀の内・目黒・亀井戸・王子・深川・すみ田川・梅若」を挙げている。

このうち、雑司ヶ谷には鬼子母神、堀の内にも祖師があり、目黒には不動、亀戸には天神、王子には稲荷、深川には富岡八幡、隅田川には浅草寺、梅若には木母寺梅若塚があり、それぞれ古くから知られた宗教施設があった。これらの地への小さな旅は、そうした宗教施設への参詣が表向きの理由であり、また民間信仰的な御利益が得られた。

しかし、単なる祈願ばかりではなく、『世事見聞録』は、先の記事に続けて、「此道筋、近来料理茶屋水茶屋の類、沢山に出来たる」と記している。つまり、こうした「願掛け」の対象である宗教施設の周辺には、料理茶屋・水茶屋があり、そこで料理や酒といった飲食のほか、その接待を女性が行うなど、遊蕩的な雰囲気に溢れており、それなりに食欲や性的興味を、そこそこに満足させる遊興施設が伴っていた。

まさしく江戸の盛り場とは、そうしたさまざまな願望を実現しうるような場であったがために、そこに吸い付けられるように多

くの人々が集まったのである「竹内・二〇〇〇」。そこで、『世事見聞録』に載った盛り場を、地図に落として、江戸城を中心に同心円を描いてみたのが、図1である。

ここから、この文化文政期には、手近な浅草や深川・亀戸のみならず、多少離れた雑司ヶ谷・堀の内・目黒・王子などといった場所まで、足を延ばしていたことが分かる。しかし、それらはいずれも江戸城からほぼ一〇キロメートル以内に納まっており、中山道・川越街道・青梅街道・東海道といった主往還の近くに位置しており、江戸のみならず近隣からも、訪れやすい位置にあった。

江戸にしたところで、一〇キロメートル以内といえは、一日で充分に往復できる距離であり、雑司ヶ谷・堀の内・目黒・王子にしても、まさに小さな旅として、多くの老若男女が出かける地理的な条件を有していた所でもあった。こうした江戸周辺の盛り場の発展は、近世後期のことであるが、小稿では、江戸から少し離れた宗教施設を伴う遊樂地を、郊外型盛り場と規定して、以下その成立事情や実態について触れていきたい。

三、郊外型盛り場の形成と繁栄―雑司ヶ谷の沿革

こうした小さな旅の目的地である神社仏閣と、その盛り場の具

体的な様相を見ていくため、ここでは郊外型盛り場の一例として、雑司ヶ谷の鬼子母神の場合を検討してみよう。こうした郊外型盛り場は、もともとは単なる江戸の近郊農村であったが、寺社の勧請などによって名所化し、基本的には近世後期頃から、江戸内外の人々が参詣・遊樂に訪れるようになって、盛り場としての繁栄を遂げていくようになる。

近世初頭の雑司ヶ谷村は、武蔵国豊島郡に属し、一七世紀中葉の実態を示す『武蔵田園簿』に、村高二五七石余うち田方六四石余・畠方一九三石余と見える(日本史料選書)。つまり水田よりも畠地が圧倒的に多い、典型的な関東農村の一つであった。その後、一九世紀前半の『新編武蔵風土記稿』によれば、鬼子母神の付近は、昔は陸田であったが、化政期には雑木が繁茂する小丘となっていたとされている(大日本地誌大系)。

すでに戦国期の永禄二(一五五九)年の成立とされる『小田原衆所領役帳』に、江戸衆「太田新六郎知行……拾貳貫五百文 江戸 雑司ヶ谷 中村二郎右衛門」とあり、太田康資の寄子である中村二郎右衛門が支配する地であったが(戦国遺文後北条氏編別巻)、その直後の永禄四(一五六一)年に、農民が土中から掘り出した鬼子母神を祀ったのが、雑司ヶ谷鬼子母神の始まりと伝えられている。

その後、鬼子母神に参詣する人々が夥しく、天正六(一五七八)

年五月三日の棟札から、本地堂を建てて、神像を安置したことが分かるが(新編武蔵風土記稿)、雑司ヶ谷の繁栄は、威光山法明寺によってもたらされた。法明寺は、古くは真言宗の寺院であったが、鎌倉期に日蓮宗に転じ、高祖を祀る祖師堂を建立したことかから、寺領一〇石を与えられて広く宗徒の信仰を集めた。その中心となる塔頭・大行院が、鬼子母神堂の別当を務めた。

やがて鬼子母神は雑司ヶ谷村の鎮守となり、日蓮宗法明寺などとともに、その門前の一部が賑わうようになり、徐々に町としての体裁を整えていった。化政期の段階において雑司ヶ谷地区は、雑司ヶ谷村・雑司ヶ谷町・雑司ヶ谷鬼子母神門前・雑司ヶ谷本浄寺門前・雑司ヶ谷本染寺門前の五つの空間からなっていた。

この化政期に、全国規模で官撰地誌の編纂が行われたが、雑司ヶ谷地区にも文政九(一八二六)年五月に提出された四地区の「地誌御調二付書上」が現存している(旧幕引継書/国会図書館蔵)。これによれば、旧来の雑司ヶ谷村は、総反別五一町五畝余で、このうちに四つの町場が存在していた。

まず雑司ヶ谷町は、田口平次左衛門を名主とし、町方居屋敷分三町七反余で、町高三七石余、総町家数一五二軒、うち家持三六軒・家守九軒・地借五軒・店借六六軒・空店三六軒で、延享三(一七四六)年に町方支配となり、村内の道路沿いの町屋部分を、雑司ヶ谷町と称したことが分かる。なお鬼子母神名物の子供手遊風

車・麦藁角兵衛獅子・川口屋飴は、この雑司ヶ谷町のものであった。

このほか雑司ヶ谷本浄寺門前・本染寺門前は、それぞれの境内にある町屋からなり、同じ名主が兼任し、前者が家主一軒・店借九軒、後者が家主一軒・地借一軒・店借一五軒となっている。また雑司ヶ谷鬼子母神門前の方が大きく、名主は太郎兵衛が務め、家数一軒のうち家持八軒・店借三軒で、その書上には次のような興味深い記述がある。

一、門前の儀は、往古雑司ヶ谷村二有之候処、天正六寅年中、社地門前二住居の百姓式三軒も有之候処、田地も無之者は水茶屋渡世致罷在、追々家作も出来致、其後は宝永七寅年中、寺社奉行鳥井伊賀守様へ家作奉願上候処、御役人角田次郎右衛門殿御見分役人野崎次左衛門殿・清水金吾右衛門殿御越御見分相濟、商売家にて渡世致罷在、其後延享二丑年閏十二月、中右門前町御奉行島長門守様・能勢肥後守様御勤役中町支配二被仰付、夫より雑司ヶ谷鬼子母神門前と唱申候、

つまり鬼子母神堂が出来た天正年間には、門前に住む農民は二、三軒で、田地を持たない者が、水茶屋を営んで生活していたが、やがて徐々に家が増えていった。そして宝永七（一七〇）年に、

商売店が認知されて門前町屋となり、延享二（一七四五）年閏二月に町立となり、鬼子母神門前と呼ばれるようになったという。おそらく参詣客の集まる鬼子母神門前の参詣道の両側に、しだいに町屋が広がり雑司ヶ谷町が成立したのである。

すでに寛政一〇（一七九八）年には成稿を終え、天保四（一八三三）年に板行された『江戸名所図会』には、

この地は遙かに都下を離るといへども、鬼子母神の靈驗著明く、諸願あやまたずかなへ協給ふか故に、常に詣人絶えず。

よつて門前の左右には貨食りようりや店軒端を連ねたり。

とあり、鬼子母神は、江戸城下から離れていても、大勢の参詣客を集めて、門前には料理屋が軒を連ねていた様子が記されている。

しかし雑司ヶ谷鬼子母神も、江戸時代を通じて賑わいを見せていたわけではなく、化政期の『続飛鳥川』には、「明和の頃までは、鬼子母神至て繁昌せり。恭按に安永の末ニも猶賑なりし」と見え、一時期、繁栄が廃れたとしている（日本随筆大成）。また文化一一（一八一四）年成立の小川頭道『塵塚談』も、「雑司ヶ谷鬼子母神予が若年の比ハ、夥しき参詣ニてありしが、近頃に至り殊の外淋しくなり、只堀の内のミ参詣多し、仏神にも盛衰あり」と記している（燕石十種）。

ただ同書では、「堀の内」を四谷堀の内としているが、先に見た津田敬順の『遊歴雜記』五編第二の二七話には、「明和の末、安永の中頃より、堀内村妙法寺の祖師不図せし事より天行出して、昔にくらぶれば雑司ヶ谷は鎖尾たりといふべし」とあるように、杉並堀ノ内の妙法寺のこととすべきだろう。いずれにしても一八世紀末から一九世紀初頭に、鬼子母神の一時的な凋落があった点に注目しておきたい。

ところで谷中の日蓮宗感応寺は、宗派上の問題から天台宗となり東叡山の管轄であったが、天保七（一八三六）年、雑司ヶ谷に建立され、池上本門寺から本尊が引越し、翌年には朱印三〇石が与えられた。この感応寺は雑司ヶ谷村の北西部に位置し、江戸在郷の人々が個人や講中で押し寄せた。『寝ぬ夜のすさび』は、総門の内外に「茶売る店はもとよりにて、酒うる家、飯うる家、料理や、蕎麦など出来て、あらたにミナ家作せしなり」と記して、高田馬場北の高田四ツ家町まで町続きになるとの噂も広がり、古屋を改築して飯屋にする農民もいたとしている（新燕石十種）。

しかし『事々録』には、この感応寺建立が、日蓮宗に信心深い大奥の局の念願であった旨が記されており（未刊隨筆百種）、おそらく大御所・家斉の強い意向が働いたため、と思われる。それゆえ五年後の天保一二年に家斉が死去すると、朱印の取り上げが決定した。先の『寝ぬ夜のすさび』によれば、寺社奉行の役人が一

〇月に雑司ヶ谷を訪れ、感応寺のみならず、門前の商人屋も全て取り壊す旨が申し渡されて、翌一三年の春には跡形もない原野に戻ったという。

いずれにしても、信心深い人々を集める著名な宗教施設が存在が、近世の盛り場にとっては、最も重要な発展の要素で、これに伴って水茶屋や料理茶屋が軒を並べた。しかし、こうした神社仏閣を中心とする盛り場は、その時々さまざまな要素で、思いのほか栄枯盛衰が激しかったことに留意すべきだろう。そうしたなかで、雑司ヶ谷鬼子母神は、紆余曲折はあったものの、近世前期を通じて町場化が進み、後期には化政期を頂点に、郊外型盛り場として全盛を迎えていたのである。

四、郊外型盛り場の様相と遊興——雑司ヶ谷の実態

では雑司ヶ谷鬼子母神一帯を中心とする郊外型盛り場の実態は、どのようなものであったのだろうか。江戸前期には、煮売・焼売などが店を構えていたが、出火を理由に、これらが禁じられていることから（御触書寛保集成）、大部分が葎賣張りなどの簡便なものであったことが窺われる。

弘化四（一八四七）年に斎藤彦麿が著した『神代余波』に、「堀の内、雑司ヶ谷なども葎賣張りの籠略なる茶屋なりしを、今は目

黒と等し並になりたり……目黒不動の辺……今ハ都会に等しき酒店多数出来たり」とある。これらの郊外型盛り場は、葭簀張りの粗末な茶屋から、次第に江戸の町と同様な酒屋が並ぶようになった、と見て良いだろう。

すでに享保二〇（一七三五）年刊とされる『続江戸砂子温故名勝志』に、「雑司谷蕎麦切 そうしかや鬼子母神、門前茶屋。同所藪の蕎麦切 社地の東の方、茶屋町を離れて藪の中に一軒有」と見える（国会図書館蔵）。このうち門前茶屋が後に触れる橘屋で、藪の中の茶屋が戸張喜惣次であると考えられている（海老澤一九五八）。少なくとも一八世紀初期には、鬼子母神門前に、それなりの茶屋町が形成されていたことが窺われる。

さらに一八世紀後半になると、『天明記聞』天明二（一七八二）年に、次のような記事がある（未刊随筆百種）。

十月雑司ヶ谷鬼子母神にて会式の節、武家の方皆々被参会、茶屋の二階より参詣の女の衣類を見とめ、悉く人を以住処姓名を被尋、それを懐紙に認め即点景物有り。当意即妙の趣向にて珍敷興也と世上に云はやせり。

「茶屋の二階」とあるところから、かなりの構造を有した茶屋の存在が窺われるほか、文政一〇（一八二七）年板の『江戸名所

花暦』には、「雑司ヶ谷 鬼子母神の境内貨食屋の奥庭あるいハ茶屋植木屋ハいうもさらなり。ミなよく菊を養い造りて、十月八日より会式なれハ、その参詣の群集をまつなり」と見える（日本名所風俗図会）。雑司ヶ谷の料理茶屋には、菊を造るほどの奥庭があったことが知られる。

一八世紀中葉に生を受け、長く雑司ヶ谷に住んだ金子直徳は、文化八（一八一二）年以降に、当地域の地誌『若葉抄』を著し（国会図書館蔵）、雑司ヶ谷の料理屋についても紹介している。まず大門を通って参道付近には、橘屋忠兵衛および小茗荷屋仲右衛門と蝶屋があつたという。橘屋は元源助といい、並木の間で団子などを売り出し、煎茶を出したりした後に、蕎麦を打つて有名となつた。

さらに小茗荷屋と蝶屋は、この地に住みついた人で、茶屋として繁昌したという。また和泉屋六兵衛という商人は、蹴鞠・揚弓・生け花の名人にして、儒学にも長けた才人で、耕向亭という店を出したとされている。これに関しては、文政七（一八二四）年序の『江戸買物独案内』に、「雑司ヶ谷 御料理」として、「御成先御用宿・紀州御本陣 橘屋忠兵衛」と「即席・会席 耕向亭源助」の二店が紹介されている（国会図書館蔵）。

その後、弘化三（一八四六）年成立の『江戸風俗惣まくり』には、

雑司ヶ谷法明寺の鬼子母神ハ、文化度までハ参詣も多く、
(マヤ)向耕亭の宴席、藪と呼ぶ、蕎麦店頗賑ハひ……又文政度より
 茗荷やといへる料理屋始り、高田通ひの客殿原も折々は通ひ
 来てより、向耕亭も藪そハもいつの程にか跡なくうせ、天保
 度にハ何となく参詣のたゆむ

という記述があり(江戸叢書)、耕向亭や藪蕎麦が衰退して、茗荷
 屋が新たに進出してきた様子が窺われる。さらに先の『遊歴雑記』
 初編一三話には、「然れ共茶屋さびれて、耕向亭も名のミにて、今
 只酒食をひさき客の絶ざるハ小茗荷やのミなり。其外は風味粗悪
 の上、懸売して食ふべからず」と見えるほか、『武江年表』文政年
 間記事にも、「雑司ヶ谷向耕亭は古き料理屋なりしが、これも文政
 中に絶たり」とある(平凡社東洋文庫)。

こうして雑司ヶ谷で著名な料理屋は茗荷屋のみとなったが、津
 田敬順は『遊歴雑記』四編五一話に、その座敷に上がった時の様
 子を、次のように記している。

頓て小茗荷仲右衛門か酒楼に飲宴しける。これハ愚老か壮
 年の頃迄ハ鬼子母神の花表トリイ前に、大茗荷やとて時めき名たゝ
 る酒楼ありしか、家衰へ滅却して今只出見世のミと也しかハ、
 一入家さかえ住居広く、追々家作して間毎／＼綺麗に、日々

もろ／＼の鮮魚を貯へ、調理又めつらしく手を尽せば彼王子
 村のえひや・あふきやの式軒にならびて、当時盛んに時めけ
 り。依て此土地に若干の酒楼軒をならふといへとも、小茗荷
 に対すへき茶やなけれハ、誰の人もミな仲右衛門か宅に飲食
 する程に、いよ／＼栄へます／＼繁昌せり。殊更参会無尽名
 広め書画の会など、ミな此家にて興行し、片鄙ながら一箇の
 酒楼と賞すへし。

この記述からは、料理屋の内部はかなり広く、それぞれの座敷
 ごとに美しい裝飾がなされ、さまざまな鮮魚を揃えて、手間暇を
 かけた珍しい料理が供されていたことが分かる。しかも、こうし
 た料理屋が王子村にも二軒あり、郊外型盛り場にも、いくつか高
 級料亭があり、そこで書画の会などが催されていた様子が窺われ
 る。

この小茗荷屋は、天保年間に、初代・歌川広重が描いた『江戸
 高名会亭尽』にも登場する(図2)。なお、こうした著名な料亭の
 場所については、昭和三一(一九五六)年に「茶屋を偲ぶ会」が、
 明治期から昭和期にかけての門前茶屋の位置を復原した図3があ
 る[「海老澤…一九五八」]。これら小茗荷屋(茗荷屋)・蝶屋・耕向
 亭の位置は、江戸時代と大きく変わらな思われる。ただ大茗
 荷屋と橘屋に関しては場所が特定されていないが、櫻並木の奥に



図2 茗荷屋 (歌川広重『江戸高名会亭尽 雑司ヶ谷之図』/『江戸の料理と食生活』小学館より)

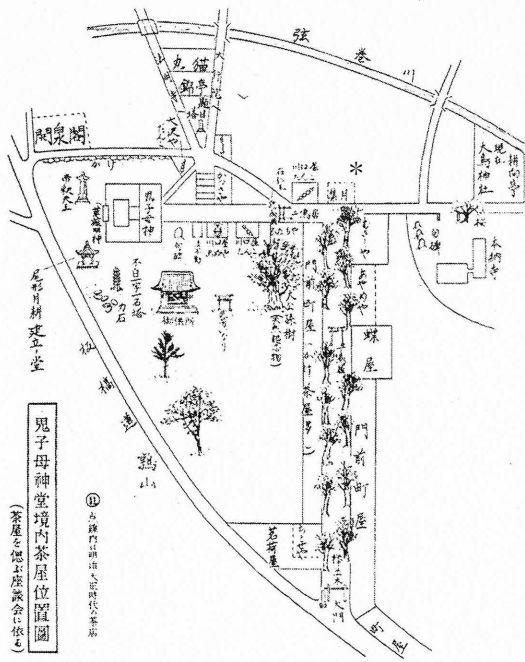


図3 門前茶屋の位置の復元 (なお、*印は明治・大正期の茶屋)

まず『東都歳事記』から、鬼子母神の祭日を一覧してみると、表2の如くである。これに見られるように、一五回の定まった祭日のほか、月ごとの定例祭を合わせると、年間五〇回以上の祭礼が催されており、かなりの頻度で鬼子母神界限に、人々が寄り集っていたことが分かる。このうちでも最も著名な祭礼は、一〇月の会式であった。

日蓮宗で会式とは、一〇月一

あつたと推定されている。

これら高級料理屋のほか、葎簧張りの茶店も含めて雑多な料理茶屋が並んでいたと思われ、天保九(一八三八)年板の『東都歳事記』雑司ヶ谷法明寺の項に、「茶店拍戸檐を^{りよりやのき}つらね、行客を停めて酔をすすむ」とある。いずれにしても雑司ヶ谷鬼子母神の周辺には、さまざまな茶店や料理屋が連なり、どこでも酒と料理が出されていたと考えてよいだろう。

こうして鬼子母神には、人々が日常的に祈願に訪れたが、当然のことながら定例の祭日に、参拝客が最も集中するところとなる。

三日が日蓮の忌日にあたることから、その前日に重要な法会が営まれる。法明寺の場合には、六日から会式花市が立ち、八日から始まって一八日まで法会・開帳が行われ、この間の人出は相当なものであったという。天保末年成立の戸張苗堅『櫛楓』によれば、この会式は、近來一五、六年は二三日まで行われるようになったといい、その理由については、「度々御成あるひは御殿方御参詣にて、延びさせられるにより例のごとく成けり。諸高家御大名御殿方日々数軒の茶屋幕とださる日なし……誠他国にも江都にも又なき賑ひなり」としている(法明寺蔵)。つまり將軍や大名が訪れ

るほど賑わうので、それらの都合に合わせて会式が延びたのだという。

また先に見た『若葉抄』には、

大名・小名の入らせらるゝハ、雑司ヶ谷の茶屋のミ。故に古来より遊女体の者、甚禁す。將軍家御代々御成被仰出の尊社ハ当社ニかきり、諸大名御奥方・御殿尊貴の御方まで雑司ヶや参詣ハ御公儀被仰達も済よし。

と記されている。すなわち雑司ヶ谷には、大名・小名のみならず、その奥方たちも参詣し、貴人が茶屋の客となつてゐるため、遊女のような輩は禁ぜられていたという。しかし遊女の問題については、簡単ではなかつた。一般に水茶屋が増えてくると、給仕女に美人を雇つて客を引く店や、飲食を提供するよりも売春を目的とする茶屋も目立つようになる。

幕府は、そうした茶屋での売春を禁じたが、やがて茶屋遊びが遊女買いと同義となり、茶屋町が色町を意味するに至つた。『遊歴雑記』初編一三話には、雑司ヶ谷の描写として「茶や町にハ両側の店先へ女達集ひ、口々にヲハインナセ／＼オヨンナへ／＼と、同音に幾人となし呼立る声又喧し」とある。

これが色町としての情景を語るものかどうか判断は難しいが、

表2 雑司ヶ谷祭礼表 (『東都歳時記』より)

月日	場所	行事	備考
(毎日) 亥日	玄浄院	摩利支天開帳	正月・5月・9月には千卷陀羅尼修行
(毎月) 8日	鬼子母神	鬼子母神参	大行院常に百度参あり
(毎月) 13日	法明寺	祖師参	
正月16日	玄浄院	閻魔参	
正月16日	鬼子母神	奉射祭	近年絶えて、法華教を誦誦するのみ
4月 8日	鬼子母神	更衣	
4月25日	鬼子母神	内拝	年一度、常経講中のため
5月18日	鬼子母神	万卷陀羅尼修行	千部28日まで修行
5月24日	宝城寺	千卷陀羅尼説法	
6月15日	鬼子母神	草薙の神事	近辺の農夫、社辺の草を刈り払う、近年なし
7月15日	鬼子母神	更衣	
7月15日	法明寺	相撲	18日まで
8月朔日	鶯明神	祭礼	痲瘡の守護神なり
9月18日	鬼子母神	万卷陀羅尼修行	
10月 6日	法明寺	会式花市	8日まで市立つ
10月 8日	法明寺	法会・開帳	茶店・料理屋軒を連れ、行客を停めて酔いを勧む
10月 8日	鬼子母神	更衣	
10月23日	宝城寺	説法	

宝曆・明和頃から化政期にかけての風俗を記した『続飛鳥川』には、雑司ヶ谷の会式に出回る歌比丘尼の様子が記されている。「歌比丘尼、うりひくに、歌ひくにハ、雑司ヶ谷会式に茶屋／＼を廻る……売ひくにハ、二人ツ、屋敷を廻る遊女也」とある。仮に『遊歴雑記』の茶屋女が遊女ではなかったとしても、歌比丘尼・売比丘尼が群衆の集まる会式などの際に、雑司ヶ谷に出向いて色を鬻いでいたことは明らかであろう。

いずれにしても『遊歴雑記』四編卷五一話に、毎年会式には「都鄙の男女群集して……茶や／＼も開しく」とあるように、雑司ヶ谷に、多くの人々が参集したことに疑いはない。江戸やその郊外から、さらには『南向茶話』に「其辺（雑司ヶ谷）茶屋あり……近郷の百姓集り角力興行するなり」と記されたように（燕石十種）、もちろん雑司ヶ谷近郷からも、祭日には実にさまざま人々が鬼子母神を訪れ、茶屋が相当な賑わいを見せていたことが知られる。

おわりに

さらに化政期に至ると、細民の女性達も盛んに出て歩き、茶屋などで飲食をおこなうようになる。先に第三章で引いた『世事見聞録』の前後には、実に興味深い記述があるので、やや長くなる

が、引用しておきたい。

今軽き裏店のもの、其日稼のもの共の体をみるに、親は辛き渡世を送るに、娘ハ鬢化粧にも能き衣類を着て遊芸又ハ男狂ひなし、また夫ハ未明より草（履）りにて棒手振の家業に出るに、妻ハ夫の留守を幸に近所合壁の女房同志寄り集り、己か夫を不甲斐性ものに申なし、互に身の蕩染なる事を咄し合、又紋かるためくり等いふ小博奕をいたし、或ハ若き男を相手に酒を給へ、或は芝居見物其外遊山物参り等に同道いたし、雑司ヶ谷……等へ参り、又此道筋近來料理茶屋水茶屋の類沢山に出来たる故、右等の所へ立入、又ハ二階等へ上り金銭を費すして緩々休息し、又晩に及んで夫の帰りし時終日の方（勞）をも厭遣らず、水を汲せ煎焚くを致させ夫を誑し賺て使ふを手柄とし、女房ハ主人の如く夫ハ下人のことく也。

この記述は、女性が次第に強くなりつつある現実を嘆いたもので、かなりの主観が混じるとともに誇張も多く、そのまま一般化することは出来まい。しかし少なくとも化政期には、都会の女性達がじつと家に閉じこもることもなく、諸所に出向いて飲食を行うようになっていたことは事実であろう。

雑司ヶ谷鬼子母神の事例で見たように、上は大名から下は細民

まで、男女を問わず、実にさまざまな階層の人々が、こうした郊外型盛り場などの茶屋の客となっていた。このように一九世紀には、江戸の小さな旅が、極めて多くの人々に楽しまれていたのである。

参考文献

- ・ 竹内誠 『江戸の盛り場・考』教育出版、二〇〇〇年
- ・ 宮本袈裟雄 『願掛重宝記』をめぐって』『歴史公論』三一九、雄山閣出版、一九七七年
- ・ 比留間尚 『境内神仏と縁日開帳』『歴史公論』三一九、雄山閣出版、一九七七年
- ・ 海老澤朋也 『新編若葉の梢』同刊行会、一九五八年

附記 本稿のうち、第三・四章は、拙稿「雑司ヶ谷の料理屋と料理——鬼子母神地区を中心に」（豊島区教育委員会編『雑司ヶ谷Ⅰ』二〇〇三年）と重複する部分が多いが、同書は一般に入手が困難であるため、事例紹介として敢えて用いた。了承されたい。なお雑司ヶ谷関係資料のうち、とくに写本類については、『豊島区史資料編 第三巻』（豊島区、一九七九年）によった。